

中国情報

中嶋 嶺雄

中国で、この夏以来ますますめざめざっている孔子批判のキャンペーンは、最近、ますます激しいものになってきている。その一たんかである十月三十一日の「人民日報」は、陝西師範大学執筆小組の論文を掲載し、孔子を激しく批判する一方、秦始皇の「革命性」を高く評価し、双剣制の階級的イデオログである孔子らの階級家に対して、当時の新興勢力としての地主階級のイデオログである法家を支

持した始皇帝「一進歩思想」の誇り王であったとたたえはじめた。さらに始皇帝による有名な「焚書坑儒」(ふんしほくじゅう)四書五経を焼き捨て、儒家の学者たちを坑に生き埋めしたにも言及して、それは新興階級が反動勢力を鎮圧するための革命的行動だとたたえているのである。中国で、なぜ今日このまじな歴史上の人物評価にかかわる思想キャンペーンが展開されているのであろうか。「焚書

坑儒」をたたえていることなどを知る。我々は例の紅衛兵運動を想いおぼえざるを得ないが、これまじ、このようなキャンペーンはすべて現実の政治闘争、党内闘争の反映であった。こうした闘争がほこと例外的な歴史上の人物評価をめぐる論争としてまぎれあわわわられたことを忘れるわけにはいかない。

五〇年代前半の「紅樓夢」論争が胡風批判となり、最近では南宗の秦裕(こんかい)、太平天国の李秀成の投降についての論争が文革初期の北京知識人批判、

孔子批判：始皇帝評価はなにを意味するか

江青らの周批判の反映？

実権派批判へと連なり、さらに清初の清官・海瑞に対する批判が、清官ゆえに官を免せられた海瑞をたたえて実は影徳懷(元国防部長)の復権を企てたものだと吳晗批判へと発展し、こうして文化大革命の幕が切って落とされたことは、我々の記憶にも新しい。

そのうえ、孔子が魯國の司寇・宰相代行として論敵・少正卯を殺したことをあげ、少正卯こそ「進歩思想」の先駆者であったといっている。

今回の孔子批判をみていこう、たとえば楊榮国(中山大学哲学系主任)の論文「頑迷な双剣制擁護の思想家孔子」(邦訳「北京周報」七三年第四一号)にもみられるように、儒家と法家の論争を「当時の思想戦線における階級闘争のあ

らわれた」として孔子や孟子の「反動性」を激しく非難し、法家の節子や韓非子の「進歩性」を高く評価したのち、こうしたキャンペーンは「現実の階級闘争に参加する」ことを意味するのだと力説している。そして「孔家店打倒」という、いかにも文革初期の「四家店打倒」(彭真、陸定一、羅瑞卿、楊尚昆打倒)を思わせる表現を用いながら、「孔家店打倒」をかかげた者でもひとたび政権の座にのぼると、逆に孔子思想を利用して反動的支配を行なったことになったと述べ

るのである。一いつた状況を、林彪異変以後の党内闘争の現実と重ね合わせてみると、孔子批判、始皇帝評価、そして殺された少正卯への哀悼などは、なにを意味するのか。私がこの欄で述べてきたように、周恩来と林彪の対立こそ林彪異変の「真相」であったとする仮説が成り立つならば、今回の一連のキャンペーンは、江青ら文革グループの周恩来批判とも思われるだけに、またまた事態は大きく展開している。

(東京外大助教)